

---

# 信じるものは救われる？

出口 常葉

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

信じるものは救われる？

### 【コード】

N5653D

### 【作者名】

出口 常葉

### 【あらすじ】

遅刻しそうになって必死で走る俺。新聞の占いに寄れば「電車に注意」とのこと。それを無視して駆け込み乗車した俺の運命は、ちよっとずつ悪いほうに転がり始めた。

信じるものは救われる？

## その1（前書き）

えーと、以前載せていた「転落」をリニューアルしたものです。

長くなったので、とても一つでは載せきれず、やむなくこっぴついう短い連載となりました。

以前よりは文章を絞り上げてスマートにしたつもりなのですが、如何なものでしょうか。

信じるものは救われる？

## その1

やばーい!!

線路沿いの道を必死で走る俺。

頭の中では赤ランプの警報が全開で鳴り響いていた。

今日はえーと……考えるのを止めよう。

今日遅刻したら今度こそ課長は拳を振るうだろうなあ。考えただけでもガクブルだぜ。

それにしても、まさか目覚し時計が止まってるとはね。よく起きたもんだ。起きた瞬間に見た針が三時になって、軽く吐きそうになったけど。まあ、走って何とかなるかもしれない時間なんだから、上出来ってことで。

ばさばさばさ……。

「うわっ……ぷっ」

突然どこからともなく飛んできた新聞紙が俺の顔に張り付いた。なんじゃこりゃあ。引っぺがして見ると今日の新聞だった。

何でこんなものが飛んでくるんだか。なにになに？今日の運勢？えーと、乙女座は……。

「電車に注意。予想だにしない事態に巻き込まれるでしょう」

どこの馬鹿だ、こんな性質の悪い占いを乗せたのは!!桃尻鳳仙  
花んか知らない名前だな。

その電車に乗るために急いでるんだって。アホか。こんな新聞、丸めてポイだ。

っていうか、そんなことしている時間も無いんだった。

やばーい!!

信じるものは救われる？

駅に入って構内を疾風のごとく駆け抜け、陸橋の階段を降り始めた瞬間、駅内に発車を告げるメロディが流れ始めた。

「1番線より、快速電車、発車いたします。尚、大変危険ですので、

駆け込み乗車はご遠慮ください」  
「なんか、俺に向かっついていわれてるみたいな……。まあ、そんなわけないし、例えそうでももう止まれん。」

遅刻する　だからエンジン　全開さ　そしてブレーキ　むしろ全壊

うむ、二秒で作ったにしては珠玉の出来だ。全開と全壊が見事な……。えーと、対句？どうでも良いや、それどころじゃないし。

駅員の笛の音がホームに響く。それと同時に俺の足はホームの ASFアルトを踏んだ。閉まり始めるドア。駅員が制止しようとするのを横目に、加速をつけて俺はその隙間に身を躍らせた。

駆け込み乗車もビックリの飛び込み乗車だ。標準体型でよかった。ドアが完全に閉まり、電車はゆっくりと走り出した。

ふう、やれやれ、遅刻だけは免れたぜ。とはいえ、疲れた。体力がなくなってるなあ。もうおっさんかなあ。

『三両目のお客様、大変危険ですので、駆け込み乗車はお止めください』

うるさいわい。お前が課長のパンチを食らってくれるなら、いくらでも安全に乗車してやるわ。

「おい」  
俺が心の中で車掌を罵っていると、えらく凄みを聞かせた声が耳に入ってきた。

立っていたのは、まぶしい金髪、ジャラジャラピアスの若造。専門用語で言うところのいわゆるヤンキー。

よくよく見れば、似た様なのが後二人。実に没个性的だな。「てめえ、何踏んでんだ」

そう言われて、初めて足の下に違和感を覚えた。下を見ると、俺の靴の下にはもう一つの革靴が。

「ああ、ごめんよ。急いでいたもんだから。それじゃ」  
必殺、うやむやのうちにトンスラ作戦。しかし、あっさり肩をつ

信じるものは救われる？

かまれて引き戻される。作戦は電光石火で失敗に終わった。

「おい、おっさん。舐めんなよ」

誰がおっさんか。まだ三十前だぞ。と心の中で猛抗議。

「人の靴、思い切り踏んどいて、なんだそのスカした態度はよ？何ついの？謝り方つてあるんじゃない？」

さりげなく、視線で助けを求めてみるが、他の乗客の皆さんは、完全に我関せずとそっぽを向いている。薄情者共め。

「だから、ごめんといいたらう」

何と無く語調を強めてみた。多分無駄かなー。

「なあ、おっさん、ごめんですむならよ、警察はいらねえんだよ」  
うん、無駄でした。

「おお、タケオ君が切れちまうぜ」

「北高の核弾頭と言やあ、おっさんも分かるだろ？手について、謝つちまえよ」

知らん。どこの世界の常識だ、それは。

「ここでシメちまってもいいんだぜ？とりあえず、足を踏んだ俺びに、慰謝料払えや」

あー、やっぱり。なんと云うか、変わり映えしないというか古典的というか、進化の過程で真つ当な人類から外れた亜種というか……。

「いい加減にしろ！！」

掴んでいる腕を払いのけようと、腕を振ったのがそもそも不味かった。

「ぐあつ」

なにやら良い感触があつて、タケオ君その場に崩れ落ちた。一撃必殺とはこのことだ。

「タケオ君！！」

その他二名が慌てて倒れたタケオ君に駆け寄る。  
よし、今だ。

俺はすかさずその場から早足で逃げ出した。

「あ、野郎、待ちやがれ」

ちいつ、気付いたか。仲間でも思いやっつけていればいいものを。

「どけ」

とか

「うわあ」

だとか背中のほうが妙に賑やか。どうやら手間取っているらしいということ、俺は歩調を速めた。

と言っても、先にあるのは先頭車両。そこまで行けばハイそれまでよ。さーて、どうしたものかな。

あいつらの若さ溢れる暴走の前には、俺の命など簡単に吹き散らされるに違いない。

「待ちやがれ!!!」

「いや、この先は先頭車両だ。行き止まりだぜ」

ちつ、意外と頭がいいじゃないか。いつそ窓から飛び降りてやるうか。

そんなことを考えていると、電車がゆっくりとスピードを落とす始めた。しめた、次の駅に着いたみたいだ。俺は心の秤に命と遅刻をかけてみた。

答え、命。

一秒もかからずに答えがはじき出されたので、降りることに決定。

……まあ、課長はきつと命ぐらいは勘弁してくれるだろう。

「地獄谷、地獄谷」

どんな名前の駅だ!!!

車掌のアナウンスが流れ、ゆっくりと電車が止まり始める。一番端のドアの前に立って、逃げる体制を作る。軽くストレッチも忘れず。

「やべえ、あいつ降りる気だぞ」

「おいてめえ、動くな!!!」

信じるものは救われる？

信じるものは救われる？

アホか。動くわい。

ドアが開くと同時に俺は電車を飛び出した。電車に乗ろうとしている人々を掻き分けて、流れを逆送し、改札に続くホームの長い階段を駆け下りる。上ってくる人たちにぶつかりそうになりながら、それでも俺は速度を緩めなかった。

階段を降り切った所で上を見ると、その他二名が階段を下りてこようとしていた。いいのか、核弾頭を置き去りで。

「あ、いやがったぞ」

「待ちやがれ！！」

くそ、目が合った。さすがは野生動物との合いの子。勘だけは鋭い。

てゆうか、逃げよう。慌てて俺は再び全速力を開始した。人ごみの間を隙間を縫って出来るだけ急ぐ。まあ、この人ごみじゃああいっ等も追いつけないだろうけど。

「どけおらあ！！」

「ぶっ殺すぞ」

何やら物騒な声。振り向くと、無理矢理人を押しのけて進んでくるその他二名の姿が見えた。重機があいつらは。

やばいぜ、速度を上げなくちゃ。

そう思ったとたん、目の前に人が現れた。いや、立っているのに気づいていなかったただけだけだ。

スーツ姿の男で、片手に携帯電話を持ったまま、驚いたような顔をしている。いやいや、そんな顔している暇があったらどいてくれ。というか、俺も避けなきゃ。

そう思うと同時にドンツという衝撃。ぶつかった弾みで俺は尻餅をついた。凄く痛い。

「うわ、ごめんなさい」

慌てて立ち上がりながら、俺はその人に駆け寄った。

ゆすぶってみても、声を張り上げてみても反応は無し。ノックアウトしてしまったらしい。まあ、生きてるっばいけど。

「本当にごめんなさいね、お大事に」  
彼には申し訳ないけど、放置決定。お詫びの心だけを置いて、俺は再び走り出した。

「おい、あそこだ」  
後ろから、そんな声が聞こえたので、俺はさらに加速した。ごめんなさい、誰だか知らないけど、死なないでください。

改札を抜け、駅の外に出ると、丁度バスがついたところだった。ぞろぞろと降りてくる乗客たち。その雑踏の中に飛び込み、そのまま流れとは逆に歩いてゆつくりと駅から遠ざかる。

ここまでくればもう大丈夫だろう。駅から十分ほど走りつづけて俺は公園のベンチでようやく一息ついた。

ふと、隣に雑誌が一冊置き去りにされていたので、何気なく手にとって見る。良くある週刊誌だった。落ち着きがてら何と無くめくって見る。

ほう、血液型占いか。えーと、俺はO型だから……。

「今週のO型は、無理をすると良くない運勢。何事も運命に逆らわず、流れに身を任せましょう。特に駆け込み乗車には要注意。とんでもないことがあなたを待っているかも」

うーむ、当たっているじゃないか。怖いぐらいに。誰だこいつは？  
桃尻鳳仙花ももじりほうせんかとな？……どっかできいたなあ？

「ラッキーカラーは緑青色、ラッキーアイテムは群書類従、ラッキースポットは忍者屋敷……」

よし、ラッキー頼みは無理。てか、こんな雑誌読みふけてる場合じゃなかった。

とりあえず、会社に電話しなければなるまい。怒鳴られるか呆れられるか、どっちみちろくなことにはならないだろうけど、まあ殴りまわされて大怪我するよりましだろう。

「……あれ？」

ない。両脇のポケットにも、ズボンのサイドポケット、果ては尻

ポケットまで探ってみたけどどこにもない。

「……あれれ？」

参った。

遅刻はいいけど、無断欠勤は不味い。

殴られるどころか、下手しなくても首ちょんぱだ。

公衆電話……見当たらない。最近は随分と減ったなあ。

いやいや、そんな場合じゃないのだ。

ええと、朝は間違いなく持って出た。電車の中、追いかけてこ…

…。そこまで考えて思い当たった。

さつき激突したときだ。そこしかない！！

時計を見た。始業までは後三十分。

俺は駅を目指して、ある意味、人生のラストスパート。あー、今

日は走りっぱなしだな。

駅が見えた。どうやら、タケオ君御一行様はいなさそう。

今がチャンス。俺は駅へと足を向けた。

「すみません」

言いながら、改札の横にある駅員室を覗いてみる。当然のように駅員がそこに座っていた。

「どうしましたか？」

「携帯電話を駅で落としちゃったみたいで……。届いていませんか？」

「ちょっとお待ちください」

そう言って駅員は奥に引っ込んでいった。奥で他の駅員となにやら喋っている。

早くしてくれー。色々と急いでいるんだよう。

「ああ、最悪だ……」

呟いたのは俺じゃない。声の主はトイレから出てきた。ああつ、あの顔は。俺は慌てて顔を反対側に向けた。さつきぶつかった男だ。

あー、何でまだいるんだよ。結構時間経ってるのに。しかも何が

信じるものは救われる？

「最悪」なんだろう。俺のせい？俺が悪い？  
ちらりと盗み見ると、男は何故かこっちに向かって歩いてくる。  
や、やばいっす。

駅員さん、ぷりーづ、はりーあっぷー！！

そのとき、駅員が戻ってきた。

「あの、これですか？」

駅員が手に持っているのは、間違いなく俺の携帯電話。

「そうですそうです」

「じゃあ、一応拾得物の引取りつてことで、こちらの書類に必要事項を書き込んでもらえますか？」

受け取るうと差し出した手の中に、差し込まれたのは一枚の紙切れ。

住所や名前、勤務先なんかを書き込む欄がある。

ええい、面倒な手間をかけさせる。金釘流の殴り書きを見よっ！  
！三十秒ほどで全ての項目に書き込み、駅員に勢い良く差し出す。

「あ、どうも。えーと、書き漏らしはないかな……と」

緩慢な動きで書類をチェックし始める駅員。

「……あの、ちょっと急ぎで使いたいですけどお」

「あ、そうですか。ではどうぞ」

最初っから渡せや。使えぬ男よ。貴様はそうして一生そこに座っているが良いわ。

ええと、会社の番号は……と。

「あの……」

会社の番号をプッシュしようとした俺の耳に、そんな声が飛び込んできた。

「はい？」

思わずそつ返事しながら振り返ると、男は駅員室のほうを向いて立っていた。

騙されたー！！

「あっー！！」

信じるものは救われる？

そう叫んで、男の動きが止まった。男の体が小刻みに震えているのが見えた。

「そうだろうなあ。」

そのまま無言で俺のほうに歩いてくる。俺は耳元まで持って行っていた携帯電話をゆっくりとポケットにしまいこんだ。

「あんた、さつき私を突き飛ばして逃げたやつだな？」

「いえ、違います」

沈黙。男の拳がプルプルと振るえる。きっと殴りたいんだろうなあ。男の姿がふと課長と重なった。

「突き飛ばして、逃げたよな？」

「ごめんなさい」

人殺しの目をしていたので、すかさず体を二つ折りに近い角度まで曲げて謝る。

頭を鷲づかみにされて、引つ張りあげられた。

いけない……怒りで我を忘れている。

「今日は、とても大事なプレゼンがあつたんだ……」

押し殺した声。ひん剥いた目と小刻みに震える体がすっぱー怖い。

「それが、あんたのおかげで完璧に遅刻だ。さつき電話してみたら、先方はカンカンに怒っていたよ。会社にも目一杯怒られた」

ははは、と自虐的に笑う。もう完全に目が危ない。

「…もし、これで取引が縮小されようものなら、うちの会社の損失は五千万以上になる」

それは大きいですね。うちの会社なら間違いなく傾きます。

というか、いい加減苦しいんだけど。

おい、駅員。ボーっと見てないで助けやがれ。節穴か、貴様の目は「ここであんたをぶん殴ってもいいんだが、私は今からでも先方に謝りにいかなければならない。とりあえず、勤務先と名前と電話番号を聞いておこうか。少なくとも、あんたの上司には一言文句を言いたい」

「いや、それはチョット……」

信じるものは救われる？

そうでなくても遅刻してるし、それはちょっと不味いですなあ。とか言える空気でもないけど。

「あっ！！タケオ君、あいつ、あんなとこにいやがった」  
突然、そんな大声が駅の中に響いた。

振り向くまでもない、学校サボりやがったな不良学生め。改めて命の危機勃発。

けど、ラッキーなことに襟首の手は緩んでいた。

「とうっ！！」

俺は襟首を掴んでいた男を思い切り突き放した。

「うわっ」

もんどりうって倒れる男。

俺はそのまま、一応定期券を見せながら改札を駆け抜ける。

駅員は何が起こっているのか分からないのか、ぽかんとしていた。全く持つて使えない男だ。電車の窓を全部拭く罰とかを推奨。

しかし、逃げる方向としてはまずったかもしれない。

だって、この先にはホームしかないわけで、そうすると電車が来ていなければただの袋小路と同じではないか。

必死だったとはいえ、我ながらなんて間抜けなのだろう。

「まもなく、一番線より普通電車、発車いたします。駆け込み乗車は大変危険ですので、お止めください」

駅の中に響くアナウンス。天の助けだ。しかも、一番線といえば、俺の会社の方面に向けて走ってくれる電車ではないか。俺は更に速度を上げ、階段を駆け上がった。

ホームに出ると同時に鳴り響く笛の音。閉まり始めるドア。デジヤヴだ。

ならば行ける筈。

俺は勢い良くドア目掛けてダッシュし、駅員の制止を振り切つて隙間目掛けてダイブした。滑り込む体、閉じるドア、走り始める電車。

ホームの上ではタケオ君御一行がこっちに何か怒鳴っていた。

信じるものは救われる？

今度こそ、勝った。

## その2 完結

さすがに疲れた。

俺は大きく一息ついた。その途端に思わず蹈鞴を踏んでしまう。やれやれ、もう無理はできないなあ。俺は手摺を求めて手を伸ばした。

ぐにぐに……。

手に当たる、柔らかい感触。何と無く数回、握ったり放したりしてみる。これと似たようなさわり心地……こないだ特殊なマツサージ屋さんで……。

唐突に嫌な予感が背筋を走った。

そこには顔を紅潮させ、怒りと羞恥の入り混じった表情を浮かべた手摺じゃない、女性が立っていた。彼女が着ているタートルネックの白いセーターの胸元には俺の手。言い訳しがたい図式の中、一瞬にして車内の空気が凍りついた。

「こんの、痴漢野郎ー！！」

女性の絶叫と同時に、俺の横つ面に凄まじい衝撃が走る。

おおっ、首がねじ切れる。

「白昼堂々と私のバストを揉みしだくなんて良い度胸だわ！！大体、ここは女性専用車輛よー！！」

胸を触る俺の手を握り、そのまま無理やり上に掲げさせられる。しまった、そうだったのか。などと悔やんでみても時はすでに遅し。

「こいつ、やっぱり痴漢よー！！」

言い訳する暇も無く、車輛内に響き渡る声で叫ぶ女性。それにしても、「やっぱり」って。酷いと思うんですけど。

「とりあえず、次の駅で降りてもらおうからね」

信じるものは救われる？

信じるものは救われる？

般若の形相でそんなことを言われ、おまけに手首は痣になりそうな力で握り締められている。

逃げようにも回りは敵だらけ。みんなの視線が痛いことこの上ない。これはまた、降りるときが勝負だな。

「あ、そうだ、ケータイ出しなさいよ」

「え？」

「あんだ、逃げるつもりでしょ」

「なにい！こ……こいつ、もしかやエスパーか！？」

「この期に及んで、何まごついてるのよ。絶対に逃がさないからね。あんな…こ、こねくり回して」

「恥ずかしいなら、照れるような表現を選ばなよ。」

「それ以前に俺は揉みしだくの方がエロいと思う。」

「何にやついてるのよ、変態！！さっさと出しなさいよ」

そんなに叫ばなくても良いじゃないか。わざわざそんなことしなくても、車両中の視線が全部突き刺さっているんだから。

「ほら、早く出して」

彼女が空いているほうの手を差し出してくる。

「こつなつたら仕方がない。」

「俺が悪かった」

つかまれている手をそのままに、突然俺は土下座をして見せた。

「ちよ、いきなり何よ！？」

「本当に、反省している。わざとじゃなかったんだ」

「え、そ、そんなことしたって、勘弁しないからね」

慌てているらしい声の彼女。

「もちろんだとも。然るべきところに突き出してきて構わない。」

「これは、俺の気持ちなんだ」

若干声などを震わせて見る。手首の力が、ほんの少し緩んだのを感じた。

「えー、何アイツ、信じられなーい」

「土下座してるよ、みっともないね」

信じるものは救われる？

「あんなことするなら、最初から痴漢なんてすんなってば」

「頭悪いよねー」

「あいつ、ぜってーにー白水星の生まれだつて。鳳仙花の占いに出てたもん。今年の一白水星は女難の相ありつて」

「マジで？桃尻つて凄くない!？」

「あれ、本気かな、油断させるつもりなんじゃないの?」

一番最後の女、余計なこと言うな。

何気に今、聞いたことのある占い師の名前が出たような……? ?

でも、車内の空気が、痴漢を見る目から痛い奴を見る目にかわり、彼女は痴漢にあった奴から、痛い奴に捕まった女、的な空気に変わってきた。

少し顔を上げてみると、若干居心地の悪そうな顔に変わってきている。

よおし、後一押し。

「あ、あのさ、そういうのは後で駅員さんのところに行つてやってよ。とりあえず立つてよ」

「いや、俺はこのままでいい。俺みたいなのは、立ち上がるのも悪いから。ほんとに、俺は悪い奴だ」

「いや、だから、そうじゃなくてさー」

彼女のほうが泣きそうな声になってきた。

ほらほら、手のロックが甘くなってきましたよー。

次の駅に着くまで、俺はひたすら土下座で詫びを入れたり、自分を貶してみたり。やってみて分かったが、これはなかなか辛い。違う意味で心が挫けそうだわ。

「あ、着いたよ。ほら、降りるよ」

「はい、本当に僕なんかのためにすみません。会社とか遅刻させてしまつて」

「いや、ほら、うん、駅員さんのところで聞くからさ、降りてよ」

電車を降りて、改札口のほうに歩こうとする彼女。

そこで俺は立ち止まってみる。

「ちょっと、行くわよ」  
そう言いながら、彼女が振り向いた瞬間。俺は勢いよく彼女の手を振りほどいた。

ぶちっ！！

なんか音がしたけど、構っている暇があるわけもない。

「ほんとにごめん。事故なんだよー」

そう叫びつつ、そのまま彼女の横を通り抜けてダッシュ。

「あ、待てー、バカーツ！！！」

彼女の絶叫。

俺は同じくこの駅で降りた数人も追い抜いて、改札を駆け抜けた。

「そいつ、痴漢ですー。今駆け抜けた奴」

彼女が後ろで叫んでいる。

ここまで逃げて捕まってたまるか！！

「待ちやがれ、下衆野郎！！ぶっ殺してやる！！」

ありえないぐらいに汚い言葉で俺を罵る声。多分駅員の物なのだろうが……下衆野郎？

この路線にはろくな駅員がいないと感じるのは俺だけだろうか。

そんな事を考えつつ、俺は咄嗟に路地に飛び込んだ。

「あ、狭い道に入ったわ」

「野郎、どこまで汚ねえんだ。皮を剥いで駅員室に飾るしかねえな

！！」

おまわりさーん、後ろに殺人鬼がいますよー。捕まえてください。  
い。

全く、今の日本はどうなっているんだ。

俺が言ったって？さもありなん。

後ちょっとで路地を抜ける。そう思った瞬間、黒塗りの高級外車

が路地の出口に横付けされた。

「おーまいがつー！もう駄目だあー！！」

後ろを振り返ると、目を血走らせた駅員と、ちよつと引き気味のターゲットルネックちゃんが路地を猛然と走ってくる。

「いつそ乗り越えるか……。と車のほうを向いた瞬間、突然後部座席のドアが開いた。」

「先生、早く乗ってください」

「へ？」

「早くー！！」

野太い男の声。

「先生？誰と勘違いしているのか分からないが、この際だ。僕は思い切つてその後部座席に乗り込んだ。」

同時にばたとドアが閉まり、車が急発進する。追いかけてきた駅員が何か叫んでいるのが見えた。多分、聞くに堪えないスラングだろう。

「何はともあれ、あの連中からは逃げ切つたらしい。」

「先生、お疲れ様でした。しかし、警察に追いかけられるとは、らしくもない」

「え？はあ……」

「いや、あれは駅員なんですけど。」

改めてその男のほうに視線を向けてみる。

「黒いスーツに黒いサングラス。ピシッとセットされた髪型。百パーセントの怪しさを醸し出している。」

「ターゲットの死亡は確認済みです。まさか喫茶店のマスターになつていようとはね。さすがは先生。見事なお手前で」

「……死亡？いや、確かに女性の胸についている脂肪ならこの手で確認したけど……。多分違うよね。」

「ただ、一つしくじりましたな」

「そう言つて、スーツの内ポケットに手を差し込む男。」

「拳銃！？」

信じるものは救われる？

男の口元に笑みが浮かび、内ポケットからゆっくりと手が引き出される。

幸いにも拳銃は握られていなかった。男の手の中にあっただのは、千切れた糸のついたボタン。

「ターゲットともみ合ったときに引きちぎられたんですな。ちゃんと回収しておきましたよ」

そう言っただけを手渡される。

男はとんとんと自分の手首を叩いて見せた。

袖口？俺のジャケットの袖口を見ると、確かにボタンが一つ取れていた。

ああ、そうかあの時の音はこれが。

よくよく見れば俺のより高級品じゃないか？

「しかし、逆に今回は引きちぎられて良かった。何しろこの時間に袖口のボタンが引きちぎられたサラリーマン風の男がこの近辺に二人もいるわけではないですから」

ご満悦のところすみません、偶然이었습니다。

「とは言え、少し遅かったようです。既に警察がかぎつけていたとはね。なかなか侮れない連中だ」

違います。

あれ、駅員。

「下っ端の連中なら、海にでも沈めて終わりなんですけど、先生は我々にとつても大事な方だ。この城田、何とか手を打ってみましょう」  
城田と名乗った男は物騒なことをさらりと言っただけ、反対側の内ポケットから携帯電話を取り出した。

ああ、そういうえば会社に連絡を取らなくちゃなあ……。

ちらりと時間を確認すると、もう完全にアウトの時間だった。恐らく、課長が烈火のごとく怒っていることだろう。怒っても良い、課長助けて。

そう思った途端、ポケットの携帯電話が震えた。取り出してみると、会社からだった。城田は携帯電話でどこかと話をしている。

信じるものは救われる？

出るなら今だろうか。そう思って、通話ボタンを押そうとした瞬間だった。

「先生えっ、電話はご遠慮くださいませ。サツに盗聴でもされたら厄介ですから」

しゃがれたような声で強く言われ、俺は慌てて携帯電話をポケットに押し込んだ。

運転していた男がミラー越しにこっちを睨んでいた。

がっしりとした体つきの、いかにも武闘派といった感じの男で、ミラー越しとはいえ、睨みつける視線には凄みがある。

「すみません」

やがて振動が止まり、同時に俺のサラリーマン生活にもピリオドが打たれてしまった。ため息をつく、体から力が抜けた。

「ははは、すみません。うちの金森はどうも荒っぽくて」

城田の電話は終わったようだ。ため息をつく俺を見て、金森と呼ばれた運転手にうんざりしたように見えたのだろうか。

「話はつきました。これから先生を逃がしてくれるところにいきますので」

逃がしてくれる？

いや、もういいんですけど……。

「金森、凌さんのところに車を回せ」

「へいっ！！」

凌さん？名前からして中国方面の人っぽいが……。

嫌な予感がするなあ。

「これから……どこへ？」

勇気を振り絞って城田に聞いてみる。城田はじいっと僕の顔を見つめた後で口を開いた。

「凌さんのところですか。先生はご存じないですか？この世界じゃ有名な逃がし屋ですよ」

「いや……聞いたことないです」

知っているわけがない。

信じるものは救われる？

信じるものは救われる？

まあ、皆さんの世界に近々デビューしそうだけど。

「まあ、先生は今まで逃げなきゃならないような事にならなかったんでしょ。だからこそ、我々も先生に頼ってきたわけだ」  
そう言っつて自虐的な笑みを浮かべる城田。

「今回のことで、ちよっとは恩返しになるといいんですがね」  
先生つて誰だよ。

「それはともかく、凌さんに任せれば、先生は絶対に捕まらずにすみませぬ。暫く身を潜めて、またほとぼりが冷めたらお迎えに上がりますよ」

いや、そんなに長いこと隠遁する気はないんだけど……。

「いやあ、しかし先生の顔を始めて拝見しましたけど、見事に普通の人ですねえ。顔無しつて名前にも納得ですよ。こりゃ、誰も気付かないわけだ。案外、街ではすれ違つてたりするんですか？」

「さ、さあ？」

「なるほど、徹底した秘密というわけだ。さすがはプロフェッショナル。憧れるなあ」

城田はそう言いながら携帯電話をカチカチと弄り始めた。

「先生、干支は？」

「は？」

「干支ですよ。何年ですか？それぐらい、教えてくれたつていいでしょう」

「ええと、午かなあ」

「ほう、それは本当？いやいや、信じますよ。えーと、今月の午年は……と」

城田は上機嫌で携帯電話を弄っている。

「あの、何を？」

「桃尻式干支占いですよ。知りませんか？巷じゃ大流行らしいですけど」

またか。一体、何種類の占いを出しているんだ、桃尻鳳仙花とやらは。

信じるものは救われる？

「あつた、今月の午年は……。やるなら出来うる限りの完璧を求めましょう。中途半端は身の破滅です。但し、道を外れた行いは必ずやあなたに報いを与えるでしょう。ラッキーな方角は西のつく方向。ラッキーな食べ物餃子だそうです」

「当たってる……のだろうか。」

「ほら、先生当たってますよ。やっぱりボタンですよ。あれのせいで危うく破滅するところでしたよ」

「いや、それは違うと思う。けど確かに、道はたくさん外れたなあ。駆け込み乗車に暴力沙汰、そして痴漢。なるほど、この状況はその報いですか。それはあんまりですよ、桃尻先生。」

「でも、安心してください。先生が今から向かうのは西です。それに、餃子も美味い。逃げ切れること間違い無しです」

「嫌な予感がむくむくと育っている。」

「でも、人違いだと今更言ったら、きつと殺されるんだろうなあ。」

「車が到着したのは、中華料理屋の前だった。」

「先生、着きました」

「ここが？」

薄汚れた看板に、立て付けの悪そうなすりガラスの引き戸。どう見ても潰れかけた大衆中華の店だなあ。

「まあ、おおっぴらに出来る商売じゃありませんからね」

「城田はそう言って、先に立って俺を店内に招き入れた。」

薄暗い店内、ぼろぼろの机と椅子、薄汚れた壁と床。はがれかかったメニューにいつのものとも知れない、ビールの広告。ノイズ交じりのテレビではワイドショーが流れている。

「エプロンを腰に巻いたおっさんが、そのテレビを見ながらぶかぶかと煙草をふかしていた。」

「開店はまだだよ」

「こちらも見ずに、しわがれた声で男はそういった。」

「凌さん、さつき連絡した城田ですよ」

信じるものは救われる？

城田という名前を聞き、凌さんと呼ばれた小男は始めてこちらを振り返った。その目は鋭くこちらを睨みつけている。

「おお、待ってたぜ」

流暢な日本語だ。小柄だが、改めてみると尋常ではない迫力を感じる……様な気がする。

「この方が、先生かい？」

「ええ、何とか逃がしていただきたい」

城田の言葉に、凌さんはにやりと笑った。

「おうよ。まかせな」

そう言って、彼がエプロンのポケットから取り出したのはパスポート。

「こいつに、先生の顔を張り付けりゃ、出来上がりだ。なに、段取りはもう組んであるから安心してくんな」

「えーと、それはつまり」

「おうよ、高飛びよ」

予想通りの回答に、俺は膝から崩れ落ちた。

「いやいや、そんなに喜んでくれなくなっただっていいぜ。こいつが俺の仕事だからなあ」

凌さんはそう言っただけははと笑った。

違う。断じて違う……。

まあ、そんなわけで俺は今ここに居るわけだ。全く、とんだ目にあつたよ。今かい？ああ、今は平和さ。だからこうしてあんたと喋っている俺は笑顔だろ？

さっきから妙に引いてないか？せっかく同郷の人間に会えたんだ、仲良くしてくれよ。

何？気になる？

何がだい？

このアフロ？

このピンクのスーツ？

信じるものは救われる？

このアニマルプリントのトートバッグ？

このフレームがトロピカルなサングラス？

しょうがないじゃないか。

○型のラッキーマスターヘアスタイルはアフロだし、乙女座のラッキースタイルはピンクのスーツだ。

ー 白水星生まれのラッキーマスターバッグはアニマルプリントのトートバッグで、午年のラッキーマスターアイテムは夏っぽいサングラスなんだからえ？誰が言ってたかって？

もちろん桃尻鳳仙花さ。

信じているのかって？さあ、どうだろうなあ。

でも俺がこうして生きているのは、この格好をしているおかげかもしれないと思うとね。

まあ、お守りみたいなもの……かな。

そう言えば、あなたの血液型は何型だい？

## その2 完結（後書き）

ここまで読んで頂いて、ありがとうございます。

自分としてはテンポを大事にして書いたつもりなのですが、如何なものだったでしょうか。

ご意見、ご感想、その他お気づきの点などありましたら、感想をいただけると嬉しいです。

信じるものは救われる？

信じるものは救われる？

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

### PDF小説ネット発足にあたって

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。

出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5653d/>

---

信じるものは救われる？

2008年11月7日08時21分発行